慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トーマス・マンにおけるBürgerlichkeit : 非政治的人間からのデモクラートの誕生
Sub Title	Die Bürgerlichkeit Thomas Manns : Die Geburt eines Demokraten aus einem Unpolitichen
Author	中村, 昌子(Nakamura, Masako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1981
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.42, (1981. 12) ,p.178- 201
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00420001-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トーマス・マンにおける Bürgerlichkeit

——非政治的人間からのデモクラートの誕生——

中村昌子

はじめに

トーマス・マンにとって「市民」(Bürger)、「市民性」(Bürgerlichkeit) の問題は、生涯を貫く重要な問題であり、彼の作家活動の支柱となったものである。マンは、市民であるとは一体どういうことなのか、市民の属性とは何であるのかを終生問い続けることによって、政治と無縁であることに高い価値をおく市民像から、「政治的、社会的な事柄は人間的な事柄の一部分を成している」(1)、という認識にまで到達し、デモクラシーの積極的な擁護者となったのである。

本稿は、第一次世界大戦というヨーロッパにとって衝撃的な体験を契機に、トーマス・マンの市民像がどのように変化したのかを、彼の文学的出発点となった小説『ブデンブローク家の人々』、戦争中に書かれた論文『非政治的人間の考察』、戦後に行なわれた講演『ドイツ共和国について』、戦争をはさんで前後十一年かかって完成された小説『魔の山』を中心に検討し、この変化を可能にしたのは何であったのか、そしてそれはマンにとってどのような意義を持つのかを考察するものである。

(一)

トーマス・マンの最初の長篇小説『ブデンブローク家の人々』が三年近い歳月を要して完成されたのは、一九〇〇年五月、彼が二五才のときである。この小説には、「ある家族の没落」という副題がついているように、古いハンザ都市リューベックの都市貴族的市民であったマンの生家をモデルとして、ある家族、つまりブデンブローク家の没落過程が四代にわたって描かれている。

インゲ・ディールセンによれば、「ブデンブローク家の歴史、この一家の一回だけの存在である各個人の特殊な運命の中には、一九世紀における市民の発展の一般的傾向が反映している」[1]。ハンス・マイヤーにとっても、「『ブデンブローク家の人々』は単に一家族の没落を意味するのみならず、同時に自由都市市民階級の没落の歴史でもある」[2]、「ブデンブローク家の運命は典型的である、特殊な例ではない」[3]のである。

トーマス・マン自身もこの小説を、「ドイツ市民階級の歴史の特質を示す作品」[4]、「家族の物語を装った社会小説」[5]と性格づけている。しかし、『ブデンブローク家の人々』は、クチンスキーが指摘しているように、実際には、一九世紀におけるドイツ市民階級の典型的な変遷過程を示しているとは言えない。[6]

この物語は、一八三五年に一代目の老ヨハン・ブデンブロークが買い入れた「メング通りの家」の落成式の場面から始まり、一八七七年の四代目ハノーの死に終るまで、約四〇年間にわたって展開する。この間のドイツにおいては、一八三四年のドイツ関税同盟の成立とともに産業革命が本格的に始まり、五、六〇年代に最高潮に達する。七一年のドイツ統一後、ビスマルクによって行なわれた経済上の諸改革で、ドイツの国内市場の統一が完成され、それと平行して対

仏戦争によってドイツに転込んだエルザス・ロートリンゲンと五〇億フランの賠償金により、ドイツ資本主義は未曾有の発展時代に入ったのであった。

このように、『ブデンブローク家の人々』の物語が展開する一九世紀の三〇年代から七〇年代は、ドイツのブルジョワジーが飛躍的な発展を遂げた時期である。まさにこのような時期に、市民階級の典型とされるブデンブローク家が、それとは対照的に最盛期から没落へと下降線をたどってゆく理由は、政治的、経済的には説明のつかないものである。そこで決定的な役割を果たしているのは、常に心理学的、病理学的要素なのである。従ってブデンブローク家の歴史を、一九世紀におけるドイツ・ブルジョワジーの歴史を典型的に示すものとみなすことはできない。「この作品は、市民の歴史にとって徹頭徹尾非特徴的であり非典型的である。(7)」(傍点—引用者)

この小説について『非政治的人間の考察』の中でマンが述べている次の言葉が、この作品の性格をよく言い表わしている。

「私にとって焦眉の急であり、私を生産的にした問題は、政治的なものではなくて、生物学的、心理学的なものであった。そして私が芸術家としてこの問題に私の注意のすべてを向けたということ、これまたおそらく非常にドイツ的であったのだろう。心的、人間的なものが私の関心事であった。社会学的、政治的なものを持ち込んだのは、半ば無意識のことにすぎず、それはさして私の関心事ではなかった。(8)」

それでは、マンの関心事であった「心的、人間的なもの」とは何であったのだろうか。それは一言で言えば、「市民」と「芸術家」の対立の問題であった。「市民」と「芸術家」の対立は、「生」と「精神」の対立として、ニーチェの影響が明らかに見られる初期の短篇小説群に既に見られるものである。その主人公達は大抵、何らかの肉体的、精神的、性

格的な欠陥、つまり病的要素を持っている（病的要素は、マンにおいては精神的なものを象徴している[9]）。そして彼らはほとんどの場合、人々や社会とのつながりを持たず、自分だけの完結した小さな世界の中で孤独に生活している。しかしある時、彼らは現実の「生」に不可避的に対置され、その時彼らは必然的に破滅するのである。それが彼らの「運命[10]」なのである。『小男フリーデマン氏』にとってはゲルダ・フォン・リンリンゲン夫人が、『道化者』にとっては馬車にのった上流市民の娘が、『トービアス・ミンダーニッケル』にとっては、彼の孤独な生活に入ってきた小犬が、『ルイスヒェン』の弁護士ヤコービにとっては彼の妻が、『墓地への道』では、ブロンドの髪に真青な目をした、自転車に乗った若い男が「生」を体現している（この青年は語り手によって、文字通り「生」(Leben) と言い換えられている[11]）。

これらの短篇小説において「生」は、生き生きとしたもの、健康なもの、有用なもの、幸福なもの、そして同時に、愚かしく、凡庸で、残酷なものとして捉えられている。しかし注意すべきことは、「精神」は必然的に「生」から拒絶され、破滅する運命にあるにせよ、「生」を熱烈に、又は、せつない愛情をもって愛するということである。そこには、トーマス・マンの「生」に寄せるアンビヴァレントな感情が現われていると言えよう。

「生」と「精神」の対立は、『ブデンブローク家の人々』のテーマでもある（このテーマは『ヴェニスに死す』に至るまで、マンにとっての中心的問題である）。『ブデンブローク家の人々』においては、生命力あふれる健康な市民が、精神化され繊細化されるに従って、実際的な生活力、生き生きした生命力を失なってゆき、没落する前に、消えゆくろうそくの最後の輝きとして芸術家が生れる、つまり市民の退化からの芸術家の誕生というかたちで、「市民」と「芸術家」の対立が形象化されている。

マンはこの小説において、実際の自分の家系をモデルとして没落の過程を描こうとした為、物語の時代背景として、

一八三〇年代から七〇年代にかけてのドイツの歴史にとって重要な事件を持ち込まざるをえなかった。しかし、一八四八年の革命がハンザ都市内での騒動として読者の視野に入る以外は、一八六六年の普墺戦争にはこの小説の最も短い章があてられているだけであり、一八七〇年、七一年の普仏戦争、ドイツ帝国成立というドイツにとって決定的な歴史的事件は目立たない箇所で簡単に片付けられている。ブデンブローク家の歴史は、ドイツの現実とは何ら本質的なかかわりを持たない。それは家族の年代記の枠を出ないのである。従って、ブデンブロークとハーゲンシュトレームという、没落する市民と勃興する市民の対比が、具体的な歴史的事件やダイナミックな経済発展の時期（例えば一八七〇年、七一年の帝国成立期）において示されるということがないのである。[12] 勃興と没落は「歴史的循環」[13]として捉えられているにすぎない。ハーゲンシュトレームも、象徴的な意味を持たせられている「メング通りの家」をブデンブロークから買い取ることにより、この循環に組み入れられることになる。健康な、元気にあふれた息子を持つヘルマン・ハーゲンシュトレームは、市民の生物学的にも生命力のある力強い段階を体現している。しかし、虚弱体質であり、文芸愛好家である弟のモーリツ・ハーゲンシュトレームの、現実において有用である以上のものに向かう傾向が既に、この一族のブデンブローク化の始まりを示していると言えよう。

この小説にはもう一つの対比、ブデンブローク家の三代目トーマスと弟のクリスチャンとの対比がある。クリスチャンは、実人生において活動し真面目に仕事をする意志を全く欠き、自分の内面や感情にのみ関心を寄せる、平衡を欠いた人間である。クリスチャンにおいては、市民的な生活倫理が崩壊することにより、人格の自己解体がおこっている。トーマスの中にも同じ解体力が作用しているが、彼は意志の力を働かせ、内面世界と外界との間の平衡の中に自分の支柱を見い出そうと努める。しかし、トーマスのこの「市民的人格への自己形成」[14]の努力は、クリスチャンに見られる内

的な自己解体の危険に対する恐れからであった。「私が現在の私のようになったのは、お前のようになりたくなかったからだ。心中お前を避けていたのは、お前から自分を守らねばならないからだ、お前の存在や本性が私にとって危険だからだ……私は本当のことを言っている。[15]」と、トーマスは述べるのである。

クリスチャンは、トーマス・マンが芸術家存在に対して抱いていた倫理的疑惑を、カリカチュアとして表現したものである。クリスチャンの中に自分の分身を見たトーマスの「市民的人格への自己形成」は、トーニオ・クレーガーの倫理的姿勢としての「市民への愛」(Bürgerliebe) に通じるものである。

『ブデンブローク家の人々』は、一九世紀の市民の歴史を典型的に描いたものではないにせよ、そこには、一九世紀末から二〇世紀初頭の第一次世界大戦へと政治的、社会的矛盾を激化させてゆくドイツの時代の危機（知識人にとっての）が反映されている。マンは後に、ドイツ市民階級の問題について、『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』（一九三三年）の中で次のような洞察を示している。

「一八四八年の革命騒動に参加したため、彼（ヴァーグナー―引用者）は十二年にわたる苦しい亡命生活を送らねばならなかったのだが、後年彼はこのことをできるだけ卑小化し、否定しようとした。その頃彼は自分の『いやしむべき』オプティミズムを恥じ、ビスマルク帝国という所与の事実を、それがうまくいくかぎりは、自分の夢の実現と混同していたのである。彼はドイツ市民階級の歩んだ道を歩んだのである。革命から幻滅への、ペシミズムへの、諦めきった、権力に保護された内面性への道を。[16]」

つまり、現実政治に関与することを諦め、「権力に保護され」て、一方では物質主義の道を、他方ではその反作用としての内面性への道を歩まざるをえなかったところに、ドイツ市民階級の悲劇があったのである。マンに見られる「市

民」と「芸術家」、「生」と「精神」の対立の思想も、このようなドイツ市民階級の状況に根ざしたものである。[17]

『ブデンブローク家の人々』を書いたことはマンにとって、どのような意味を持ったのであろうか。マンはこの小説を書くことによって、自己のアイデンティティーを求めようとしたのであった。現在ある自分、自分は一体誰なのか、どこから来たのか、そしてどこへ行くのか。自己の家系をたどって形象化することにより、これを求めようとしたのである。「古い純粋な市民性」[18]が芸術的なものへと変質する過程、市民からの芸術家の誕生をたどることにより、マンは自己の存在を正当化しようとしたのである。

「私が体験し形象化したもの――しかし実は、形象化することにより初めて体験したのだが、――それは確かに市民の発展と現代化ではあった、しかしブルジョワへの発展ではなくて、芸術家への発展なのであった。[19]」

作家としてのマン、芸術家としてのマンにとって今や、自己の出自である「市民」が自分の基盤をなすものとして意識されるのである。マンにとって重要であったことは、芸術家は市民から生み出されるものである、芸術家精神は市民精神の中から生い育つものである、という認識であり、そのことを内面的に深く体験し、意識したことであった。文化と芸術の担い手としての「市民」が自分の基盤をなすものであることを、マンは確認するのである。このことは後のマンの発展にとって重要な核となるものである。

(二)

一九一四年に第一次世界大戦が勃発したとき、ドイツの知識人たちは大部分、戦争賛美の合唱に声を合わせ、「運命の陶酔」[1]に陥った。マイネッケによれば、「一九一四年の日々の高揚は、それをいっしょに経験したすべてのものにと

って――その一時的な性格にもかかわらず――いつまでもなくならない、きわめて崇高な追憶に値するものの一つ」[2]であった。トーマス・マンも、出征する弟をミュンヘンの駅に見送ったときのことを次のように書いている。

「人でぎっしりうずまった駅々は真夏の暑さのなかに混乱をきわめ、かき立てられ不安と熱狂にひきちぎられた群衆の波が絶え間なくわきたち、私達の周囲をとりまいていた。運命は軌道に乗ったのである。私は精神的ドイツ主義が受けた運命的な感動をともにした。このドイツ主義の信念には、多くの真理とともに誤謬が、正義とともに不正がふくまれていて、それだけに非常にこわくもあるが、しかし大局からみれば有益な、われわれの成熟と成長を促す教訓に向うものであった。私はこの困難な道をわが国民（Volk―引用者）とともに進んでいった。私の体験の一段一段は、わが国民の一段一段でもあった。だから私はこれを是認したい。[3]」

ドイツ市民階級の内部に、市民階級と労働者階級の間にあった裂目は、戦争という「感動的」な、「崇高な」共通の体験のために突然覆い隠され、ドイツ人はひとつであることを感じたのである。さらに、多くの知識人によって期待されたのは、戦争という共同の体験による国家と文化の全体にとっての「内面的な更新」[4]であった。彼らは銃またはペンを持って戦うことを望んだ。トーマス・マンも、この「運命の陶酔」の中で自分の芸術上の仕事を続けることが精神的に不可能になり、とりあえず書き上げたのが、愛国主義的、国粋主義的な論文『戦時随想』（一九一四年）であり、『フリードリヒと大同盟』（一九一五年）であった。ところがこれらの論文に対して外国から、そして国内からも、つまりロマン・ロランと、こともあろうに兄ハインリヒ・マンから激しい批判を浴びせられることになる。特にハインリヒ・マンの『ゾラ論』（一九一五年）は、トーマス・マンにとって屈辱的な、我慢のならぬものであった。「この『ゾラ論』は、ハインリヒ・マンの『私は弾劾する！』（J'accuse !）であった。フランスの政治権力が知的な追従者や賛美者

たちの支持のもとにユダヤ人士官ドレフュスをスパイ容疑で裁判にかけたとき、愛国的情熱のために真理と正義がこうむった凌辱にたいしてゾラがおこなった抗議（プロテスト）――ハインリヒ・マンは、このゾラの抗議を、ドイツの戦争および熱狂的にこれを煽動するドイツの文筆家たちにたいするかれ自身の告発の歴史的かくれ蓑として利用したのである。[5]」

ハインリヒ・マンの批判は、トーマス・マンにとっては、あてこすりやほのめかしによって彼に向けられた個人攻撃であっただけでなく、彼の芸術家としての存在基盤であるドイツ文化とその伝統に対して向けられたものでもあった。政治＝デモクラシーが新しい時代のパトスとして、非政治的なドイツ文化に対して批判を浴びせかけたのである。これに対する反論の書が『非政治的人間の考察』（以下『考察』と略す）である。トーマス・マンにとっては、「自己の土台をゆすぶられ、自己の存在価値を脅かされ疑問に付された芸術家精神[6]」そのもの、「その自己探求と自己主張のあらゆる基盤の検討が不可避であり、この検討なしには芸術家精神の（……）あらゆる行動、営みが以後は不可能事になる[7]」、と思われたのである。こうして二年以上にわたる「探求、格闘、模索、霧のなかへ踏みこんでの（……）この弁証法的な戦闘[8]」から生み出されたのが、六〇〇ページ近くにも及ぶこの『考察』という書物である。

マンはまず自分を、「精神的本質においては、私の人生の最初の二五年が重なる世紀、つまり一九世紀の嫡出子[9]」であると規定する。確かに自分の中には、新しい時代のものである要素、欲求、本能が存在しているが、自分の精神の重心は一九世紀にある。「ロマン主義、ナショナリズム、市民性、音楽、ペシミズム、フモール――過ぎ去った時代のこれらの諸成分はだいたいにおいて、また私の存在の非個人的な構成要素でもある。[10]」そして新しい時代二〇世紀は（マンは二〇世紀を、その精神において一八世紀に近いものとする）、この一九世紀を誹謗する。

「二〇世紀は信仰する――あるいはとにかく、信仰しなければならないと教える。二〇世紀は――人間をそのユートピ

アに適合させるために――『人間の本性について知っていること』を忘れようと努める。二〇世紀は全く一八世紀ふうに『人間』に夢中になっている。二〇世紀はペシミスティックでなく、懐疑的でなく、シニックでなく、そして――この点は少なくとも言えることだが――イローニッシュではない。あの『望ましいことに奉仕する精神』、これは明らかに、二〇世紀が考えている精神である。それは二〇世紀の精神、――社会的人間愛（フマニテート）の精神である。[11]二〇世紀にとって問題は社会であり、政治である。[12]進歩は今や「ドグマ」になっている。これらをひっくるめたものが「新しいパトス」[13]である。それは「断固たる人間愛」[14]を告知し、あらゆる倫理性をわがものとする。政治的な姿をとって現われてきたこの「新しいパトス」に対する自分の嫌悪、抗議は、個人的なもの時代に限定されたものではなく、国民的な本質そのものであると述べる。「精神は政治ではない。」[15]政治＝デモクラシー（両者はマンにとっては同じものである）はドイツ的本質にとって異質であり、有害である。「ドイツ民族は、政治そのものを愛することができない、という単純な理由から、政治的デモクラシーを決して愛することができないであろう。そして、悪名高い『官憲国家』はドイツ民族にぴったりの、ふさわしい、結局はドイツ民族の欲した国家形態であるし、今後ともそうであり続けるであろうと、私は深く確信している。[16]」と、一種、開き直りすら感じられる言葉を吐くのである。

(三)

トーマス・マンは『考察』の中の一章において「市民性」についても検討を加えている。

「私はこれから市民性について、市民性と芸術について、市民的芸術精神について語ろうと思う、――今度の戦争において人々の感情を害した私の態度はこの市民性と何らか関係があるかもしれないと、おぼろ気ながら感じられるし、

このような検討を行なえば、一個人を越えた一般的な関心にとってあれこれの刺激になるであろうと、ほとんど確信できるからである。[1]」

市民性についてのマンの出発点は、「ドイツ的なものと市民的なものは一つである[2]」ということである。精神はそもそも市民的なものに由来するが、ドイツ精神は「特別な形[3]」で市民的である。この「特別な形」を示すことが「市民性」の章の主目的である。

マンにとって、市民的精神性、市民文化的タイプを代表する「ドイツ的芸術家、造型する人間の典型的にドイツ的な変種[4]」のイメージは次のようなものである。

「比類なく取り違えようのない、国民的（national—引用者）な特徴を帯びた、やや横向きでうつむき加減の顔が見える、どことなく古風で木版画ふうであり、ニュルンベルク市民ふうで、類例のないような意味合いで人間的であり、倫理的に精神的であり、厳格であると同時に柔和な顔、——内面を見つめると同時に遠くを眺めやる、『きらきら光る』というよりはむしろ少しく生気のない目、きりっと結んだ口、気づかわしげながら不機嫌とは思えない皺を寄せている額の緊張と疲労のきざし……皇帝党員だろうか、それとも教皇党員だろうか？　いや違う、『最善を尽したあと、瞑想にふけりながら天助のいたるのを待っている、物静かな芸術家にすぎない。』[5]」

これが「新しいパトス」を体現する「文明の文士」と対照的なドイツ市民のイメージである。明らかにドイツ中世都市市民をイメージしているこの「形而上学的な職人[6]」はマンによれば、人間的で都市的であり、コスモポリタンな精神を持ち、市民的な教養を身につけており、国民的である。本質的に国民的であるから、国民的な本質が危機に見舞われたときには、自らの本質を痛切に自覚することになる。しかし、それだから政治家になるわけでは決してない。「人権論者となり自

由の宣伝家になる」[7]ことは断じてない。「西欧デモクラシーの街頭感覚を持つ政治」[8]とは何のかかわりもないのである。

マンは中世都市市民のイメージをもってくることにより、今次の戦争に対する自分の態度は、ドイツ精神に、国民的本質に深く根ざした正統な、従って正当なものであること、ハインリヒ・マンに代表される「文明の文士」のデモクラシー＝政治の精神は西欧のものであり、ドイツにとって無縁のものであることを示そうとしている。さらにマンは、歴史的にもこのことを正当化しようとする。

マンによれば、この「形而上学的な職人」はドイツの歴史においては、「聖職者と騎士の時代に続く、市民の時代、ハンザの時代、都市の時代」[9]に属している。そしてこの時代にドイツ的本質が固められたのである。この時代に、「ドイツの世界において市民性と精神性、市民性と名匠精神とがいつまでも緊密な同意語であり続ける」[10]という事態が生じたのである。そしてこの「純粋な文化時代」[11]が、政治的ではなかったがしかし、「最高度に国民的」[12]、「意識的に国民的」[13]であったように、ドイツ的市民文化を代表するタイプも勿論、国民的ではあるが政治的な人間ではなかった。

マンは自分がこの「形而上学的な職人」の末裔であること、自分が市民であることを確認する。「私が現にあるとおりの私であり、別の私にすることも望むこともできないとすれば、私はいったい誰なのか、どこから来たのか？　魂が苦境に立つ時代、ひとはこのことを尋ねる。――私は都市の住民であり、市民であり、ドイツ市民文化の子であり、末裔である。」[14]

マンによれば、ドイツ市民の起源である中世都市市民は、文化と精神の担い手であり、本質的に国民的ではあるが、政治＝デモクラシーとは何のかかわりもなかった。そしてこのドイツ市民性は、「不滅のものであって、いかなる発展、いかなる進歩によってもはなはだしく侵されえないもの」[15]と考えざるを得ない、と述べて、自己の非政治的な市民性

が歴史的にも正当なものであることを主張しようとするのである。そして、この戦争への自分のかかわりも、政治、経済とは全く関係のないものであり、自分がかかわったのは「ドイツ文化が外部から恐ろしい精神的な圧力と襲撃を受けてやむなく行なうことになった、あの熱情的な自己認識、自己限定、自己強化の過程」[16]なのだと述べる。

この「市民性」の章においてマンは、彼がその教養の多くを負っているニーチェ、ヴァーグナー、ショーペンハウアーを引用して、彼らに体現されているドイツ的市民性、教養ある市民性、人間的、芸術的市民性がいかに政治とは無縁のものであるか、政治に敵対するものであるかを、繰返し述べている。

それでは、マンが非政治的なドイツ市民性の正当化の根拠とした中世都市市民は、実際にマンが考えていたような存在であったのであろうか。

(四)

「市民」(Bürger) という語は、語源的には「都市」(Burg) に関係があり、元来は自由にして完全な権利を持つ都市の住民 (Stadtbürger) の総称であった。つまり古代や中世の非自由民や半自由民、あるいは一時的な寄寓者や出稼人などと区別される「都市共同体の正規のメンバー」という法的な概念であった。[1] 市民になれば、少なくとも法的には平等の自由身分で統一される。この市民が誓約共同体を結成して、都市領主に対し革命的反乱、いわゆるコミューン運動を起こし、度々の弾圧にもかかわらず、最終的には都市領主権に打ち勝って、自治権を獲得していった。そして自由かつ独立の人格である市民が平等の立場で都市自治を行なったところに、市民の歴史的意義があると言えよう。都市自治が完成して頂点に達するのは、中世も末の一四、一五世紀である。一六世紀の初頭には、中世末期以来の都市の経済

的繁栄とそれに伴う市民層の盛んな精神的活動が頂点に達する。しかし、その後都市は次第に領邦国家の体制に組み込まれて停滞していく。ドイツの都市市民の輝かしい盛んな精神が失なわれてゆく事情を、フリッツ・レーリヒの名著『中世ヨーロッパ都市と市民文化』の中から、少し長くなるが引用して見てみよう。

「国家内部で作用した力は、勝ち誇った諸侯、すなわち封建制の力であった。これらの国家や小国家にとって、都市と市民は、支配と統治の対象としてのみ意味をもち、ともに国家全体を治め、ともにその精神をつくる力の源泉とはみなされなかった。(……) ドイツ分邦国家の支配者は諸侯と貴族であり、自己の独立性と引き換えに、宮廷、軍隊、行政機構での指導的な地位を得た者であった。法律家も重要な役割を演じた。しばしば市民出身の法律家もいた。しかし彼らは、諸侯の傭人と自覚するだけで、農村貴族となった多数の都市門閥とまさしく同様に、市民の出自を忘れ去った。このようなすべての理由から、ドイツでは国家への組み込みが、他国とは全く反対に、あの古き市民生活の精神的・知的基盤をも破壊するにいたった。しかもこの破壊は、事実核心にまで達した。かくして、ドイツ史上極めて運命的な諸世紀が始まった。この時期に、中世に対外政策上でも非常に輝かしい活躍をみせたドイツ市民層、すなわち都市の商人たる上層市民が政治活動から組織的に追放されて活気を失い、政治的に滅んだ。(……) 自己の運命を自らの手で切り開き、広い地域で活躍した市民の誇り高く毅然たる生き方に代って現われたものは、それに続く数世紀の臣民たちの狭量で卑屈な態度であった。(……) 領邦諸国家の内部やその狭間にあってドイツ諸都市はその後控え目な生活を送っていたが、遂に三〇年戦争が大部分の都市にまだ存続していたかなりの繁栄の息の根を止めた。今や、だが今や初めてまた、われわれが俗物市民(シュピースビュルガートゥム)と呼ぶ陰険かつ狭量な市民層が形成された。その生活様式は、ドイツ市民階級の後期の堕落現象であり、市民階級そのものを特徴づけるものではない。(……) ドイツ都市のあの光輝ある精神、そしてそれをと

もないそれを通じて都市で発揮されたあの政治能力は、今や抑圧され、いや反対物にすら転化させられた。[2]」

以上見てきたように、マンが自らの正当化のための根拠とした中世都市市民は、歴史的現実においては、デモクラシーの原理に基づいて都市の自治を行なったところの政治的な存在であった。自らが自らの主人として、政治、経済、文化の担い手として、「誇り高く毅然たる生き方」をしていた。政治＝デモクラシーはドイツ市民にとって、本来、無縁のものではなかった。いや、本来、ドイツ市民の基盤を成すものであった。その上にこそ都市市民の「光輝ある精神」、文化、芸術の華が咲いたのである。むしろドイツ市民の非政治性は、ドイツ市民階級の「後期の堕落現象」であり、「市民階級そのものを特徴づけるものではない」のである。この点に注意を向ければ、第一次世界大戦後、マンが保守的な、反デモクラティックな君主主義者から、理性的共和主義者、デモクラートへと一見唐突に思われる転身を遂げたのも、さして不可解なことではないのである。転身を可能にしたのは、マンが自分の内に自分の基盤としての「市民」を、正確には「中世都市市民」を理念として持っていたからなのである。

(五)

徹底的な自己探求の書である『考察』を書きながら、トーマス・マンは自分が変りつつあること、変らざるを得ないことを感じていた。ドイツ市民精神がいかに政治＝デモクラシーとかかわりがないか、いや、敵対的ですらあるかということが、えんえん六〇〇ページ近くにわたって述べられているこの書の序文（最後に書かれた）において、マンはこのことをほのめかしている。「人は、心を煩わす必要がない事柄、そのことについては何も知らず、それを自分自身のうちに、自分の血のなかに全く持っていないがゆえに関係のない事柄については、これほどまで心を煩わしはしない

ものだ。[1]」そして、「私自身が、ドイツの『進歩』を促す諸要因を私自身の保守的な内面に持っているのであろうか？[2]」と自問している。ここには、後のマンの転身の可能性がほのめかされてはいる。しかし、マンが理性的共和主義者として登場するまでには、なお四年もの時間を要したのである。

一九二二年十月、マンはハウプトマンの六〇歳の誕生記念にあたり、ベルリンで『ドイツ共和国について』と題する講演を行なう。そしてこの講演においてマンは、今度は一転して共和主義者として現われる。

「共和国……私の口からこの言葉を聞いて諸君はどう感ずるだろうか？（……）私の意図は、はっきり申しあげれば、必要なかぎり諸君を共和国のために獲得することであり、デモクラシーと呼ばれ、私が人間愛（フマニテート）と呼ぶもののために獲得することであります。[3]」そしてマンは、今やドイツ国民の「内的事実[4]」となった共和国、デモクラシーへの「運命愛」(amor fati) を呼びかけるのである。先頃まで君臨していた勢力は追い払われ、もはや存在しない。国家は国民一人一人の手に委ねられ、自分たちで処理しなければならない問題になった。これまでは国民生活と政治生活は分離しており、国民は政治生活には関与せず、経済生活に、精神生活に没頭していた。しかし今や、国家は国民全員の問題となり、国民が国家となったのだ。そして、それが共和国というものなのだ。マンは、共和国、デモクラシーに対するドイツ人一般の抵抗は単に言葉に対する恐れにすぎないと言う。共和国、デモクラシーは「言葉であり、相対的なものであり、時代に規定された形式であり、必然的な道具なのであって、それらの意味するものはこの国に縁のないペテンに違いない、などと思い込むのは、まさに子供っぽい態度に他ならない。[5]」

そしてマンは、共和国、デモクラシーをドイツ人に首肯させるために、ドイツ・ロマン主義を持ち出す。彼は、ドイツ・ロマン主義にはもともとデモクラシーの要素が含まれており、従って共和国はドイツ人にとって異質なものではな

いこと、人間的、芸術的、国民的、世界主義的要素のすばらしい結合であり、ドイツ人の魂の故郷というべきドイツ・ロマン主義にデモクラシーをつなぐことは可能だということを、ノヴァーリスをホイットマンに結びつけて引用することにより説得しようとする。そして最後にロマン主義の本質を規定する「死に対する共感」に触れて次のように述べている。

「死に対する共感が悪徳のロマン主義と化するのは、死が聖化しつつ聖化されて、生のうちに受容されずに独立の精神的な力として生に対置される場合だけではないでしょうか？　死と病気に対する関心、病理的なもの、没落に対する関心は、生に対する、人間に対する関心の別種の表現にすぎない。(6)」

「精神の変形（メタモルフォーゼ）のうちで、初めに死に対する共感、最後に生への奉仕の決意のうかがわれるメタモルフォーゼほど、私たちがよく心得ているものはない。(7)」

そしてこの、初めに「死に対する共感」、最後に「生への奉仕の決意」というメタモルフォーゼを大規模な思想の闘いというかたちで展開したのが、一九二四年に発表された小説『魔の山』である。この小説は大戦前から既に書き始められており（一九一三年執筆開始）、時期的にも、テーマの上でも、『考察』、『ドイツ共和国について』と密接な関係にある。

『魔の山』の形式のために幸福だったのは、「戦争に強いられて、自分の基礎になっているものを全面的に検討したこと、すなわち、『非政治的人間の考察』という良心に関する骨の折れる作品を書いておいたことだが、この作品のおかげで、この長篇小説から、重苦しく思いわずらうという一番厄介なことを取除いた、ないしは、小説のためになるように遊戯的な取扱いをして、構成的に熟したものにすることができたのである。(8)」とマンは後に述べている。

物語としては、一人の「単純な」青年、ハンス・カストルプが、故郷ハンブルクからスイスのダヴォスへ行き、サナトリウムで療養している従兄を見舞うが、自分も肺を病んでいることがわかり、そのままそこに留ることになる。そしてはじめ三週間の予定であったハンス・カストルプの滞在は七年間にも及び、第一次世界大戦の勃発とともに彼は山を降りるのである。筋としてはこれだけのことであるが、このスイスのサナトリウムは、一九一四年直前のヨーロッパを象徴するものである。それは「熟し切った平和にあき、いつでも死の舞踊に赴く用意のある、表向きは繁栄しているが中味はくさった、ヨーロッパ文明の投影」[9]である。そしてそこで、生と死、健康と病い、光と闇、デモクラシーと反動の間の思想的闘いが、「単純な」青年、思想的には白紙状態のハンス・カストルプをめぐって展開されることになる。イタリア人の人文主義者ゼテムブリーニは、啓蒙思想の子であり、合理主義者、進歩の弁士である。彼は明らかに「文明の文士」を表わす人物である。それに対し、ユダヤ人のジェズイット、ナフタは非合理主義者、進歩の敵である。ハンス・カストルプは、この二人の教育者にはさまれて、思想的に教育され成長していく。しかし彼はどちらにも与することはしない。そして決定的な悟りに達するのは、雪の中をスキーで散歩に出かけ、吹雪に遭って死にそうになったときに見た二つの夢によってである。一つは南国の美しい海辺の景色と、そこにいる美しく、健康的な、聡明な、幸福な人達の光景である。もう一つは、その光景の背後にある神殿の内部で、年老いた醜い女が二人、幼児を引き裂いて肉片を貪り食っている血の饗宴であった。このときに彼は、死は生の中に含まれていること、そして死よりも強いのは理性ではなく愛であることを悟るのである。

「人間は対立物の主であり、対立物は人間によって存在する。従って人間はそれらよりも高貴なのだ。[10]」

「人間は善意と愛のために、その思考に対する支配権を死に譲り渡すべきではない。[11]」

しかし、ハンス・カストルプはなおも魔の山に留り続け、彼が山を降りるには、第一次世界大戦の勃発が必要であった。

『魔の山』は、死に対する共感をくぐり抜けたマンの、生への、未来への、愛への信仰告白であり、マンの作品と発展において新しい方向と転回点を示すものである。

結　語

トーマス・マンの初期の作品における「市民」と「芸術家」（又は「生」と「精神」）の対立のテーマは、社会における現実的、実際的な活動とは無縁で、審美的な精神の世界にのみ生きる芸術家存在に対するマンの倫理的疑惑から生じたものであり、早くから作品に現われる「市民に対する愛」は、マンの倫理性が「市民」を基にしたものであることを示すものである。

『ブデンブローク家の人々』の意義は、これを書くことによってマンが、文化と芸術の担い手としての「市民」が自分の存在の基盤をなすものである、と認識したところにある。しかしこの時期には、「市民性」はまだ内的な、倫理的、審美的な価値としてしか捉えられず、社会的、政治的内容を得るのは第一次世界大戦後、ワイマール時代以後である。戦争中に書かれた『考察』においてマンは、ドイツ市民精神は政治＝デモクラシー（両者はマンにとっては同一のものである）とは本来的に無縁である、と執拗に主張した。しかし、その四年後にはデモクラートたることを宣言するのである。この一見唐突に思われる転身を可能にしたのは、マンが自分の存在の基盤としてもっていた理念としての「市民」、正確には「中世都市市民」であった。

ワイマール共和国、上に君臨する何者もなく、自らが自らの主人となった国家、国民一人一人の手にその運命が委ねられるに至った国家は、マンにとってはまさしく、中世都市（国家）のアナロジーであった。中世都市（国家）を拡大したものが共和国なのであった。中世都市市民はデモクラシーの原理に則って都市自治を行なったところの、本来、政治的、経済的な存在であり、その盛んな光輝ある精神によって、文化、芸術も栄えたのである。「市民」、「市民性」を非政治的なものとする考え方は、ドイツの歴史に根ざした歪んだものであることにマンは気づくのである。後年述べているように、「デモクラシーはヨーロッパのすべての道徳と文化の諸々の土台および支柱と同じものである」[1]こと、「政治それ自体は、それなくしては精神が腐敗堕落してしまうところの、精神の道徳性に他ならない」[2]ことにマンは気づくのである。

「市民」、「中世都市市民」を理念としてもっていたことによりマンは、政治＝デモクラシーと「本来的」に無縁であった市民像を修正し、政治、経済、文化の担い手としての本来の市民像を持つことができたのである。中世都市(国家)を拡大したものとしてのワイマール共和国は、マンにとってまさに擁護すべきものとなったのだった。これ以後、マンのデモクラシー擁護の実践活動が始まる。講演『ドイツ共和国について』はその宣言なのであった。市民であることは人間であることであり、人間であることは市民であることである。従って、「市民性」を追求することは「人間性」(Humanität) を追求することに他ならないのだ。この新しく獲得された認識はこれ以後、揺らぐことはないであろう。この認識があったからこそ、マンはファシズムとも断固闘うことができたのであった。

注

はじめに

(1) Thomas Mann: Kultur und Politik. In: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt a. M. 1974. Bd. XII, S. 853 (以下 G. W. と略す)

(一)

(1) Inge Diersen: Untersuchungen zu Thomas Mann. Die Bedeutung der Künstlerdarstellung für die Entwicklung des Realismus in seinem erzählerischen Werk. Berlin 1959, S. 21
インゲ・ディールセンはこの見解を後に変えている。vgl. Inge Diersen: Thomas Mann. Episches Werk, Weltanschauung, Leben. Berlin u. Weimar 1975, S. 44

(2) Hans Mayer: Thomas Mann. Werk und Entwicklung. Berlin 1950, S. 42 なお、三〇年間絶版になっていた本書は近年、Hans Mayer: Thomas Mann. Frankfunt a. M. 1980 に収録された。

(3) Hans Mayer: a. a. O. S. 37

(4) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: G. W. Bd. XII, S. 139

(5) Thomas Mann: Zu einem Kapitel aus 〉Buddenbrooks〈. In: G. W. Bd. XI, S. 554

(6) (7) J・クチンスキー「トーマス・マン——ドイツ・ブルジョワ・ヒューマニストの社会的成長に関する二つの研究」青木順三訳、『トーマス・マン全集別巻』(新潮社、一九七五年) 一六〇頁 (以下『全集』と略す)

(8) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: G. W. Bd. XII, S. 140

(9) vgl. Thomas Mann: Vorwort zu einer Bildermappe. In: G. W. Bd. XI, S. 583

(10) Thomas Mann: Der kleine Herr Friedemann. In: G. W. Bd. VIII, S. 99

(11) Thomas Mann: Der Weg zum Friedhof. In: G. W. Bd. VIII, S. 191

(12) Michael Zeller: Bürger oder Bourgeois? Eine literatursoziologische Studie zu Thomas Manns ‚Buddenbrooks' und Heinrich Manns ‚Im Schlaraffenland'. Stuttgart 1976, S. 26

(13) Michael Zeller: a. a. O. S. 27

(14) Georg Lukács: Thomas Mann. Berlin 1953, S. 18
(15) Thomas Mann: Buddenbrooks. In: G. W. Bd. 1, S. 580
(16) Thomas Mann: Leiden und Größe Richard Wagners. In: G. W. Bd. IX, 418—419 青木順三訳『全集Ⅸ』三三二頁
(17) マックス・ヴェーバーは一八九五年、フライブルク大学教授就任講演で、経済的に強力なブルジョワジーの政治的無力という問題を次のように強調した。「経済的に没落しつつある階級が政治の支配権を握っているのは危険であって、そうした状態が長引くと国民の利益とあいいれなくなる。……しかしそれよりもいっそう危険なのは経済的力がある階級の手に移ってゆき、それとともにその階級には政治の支配権を握る見通しが開けているにもかかわらず、その階級が国家を支配できるほど政治的に成熟していないという状態である。この二重の危険な事態が現在のドイツを脅かしているのであって、実はこの点にこそ、わが国に迫っている危機の実相を解く鍵がある。」木谷勤『ドイツ第二帝制史研究』(青木書店、一九七七年) 七頁
(18) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: G. W. Bd. XII, S. 139
(19) Thomas Mann: a. a. O. S. 140

(二)

(1) Thomas Mann: Lebensabriß. In: G. W. Bd. XI, S. 128
(2) マイネッケ『ドイツの悲劇』矢田俊隆訳(中公文庫、昭和四九年) 四八頁
(3) Thomas Mann: a. a. O. S. 126—127
(4) マイネッケ、前掲書四八頁
(5) Erich Heller: Thomas Mann. Der ironische Deutsche. Frankfurt a. M. 1970, S. 126—127 前田敬作・山口知三訳『トーマス・マン——反語的ドイツ人』(筑摩書房、一九七五年) 一五九頁
(6) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: G. W. Bd. XII, S. 12「考察」は森川俊夫訳を参照した。(『全集Ⅺ』)
(7) Thomas Mann: a. a. O. S. 12
(8) Thomas Mann: a. a. O. S. 10

(9) Thomas Mann: a. a. O. S. 21
(10) Thomas Mann: a. a. O. S. 22
(11) Thomas Mann: a. a. O. S. 26—27
(12) (13) (14) Thomas Mann: a. a. O. S. 27
(15) Thomas Mann: a. a. O. S. 31
(16) Thomas Mann: a. a. O. S. 30

(三)

(1) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: G. W. Bd. XII, S. 102
(2) (3) Thomas Mann: a. a. O. S. 107
(4) (5) Thomas Mann: a. a. O. S. 113 (5) は森川訳『全集XI』九三頁
(6) (7) (8) (9) Thomas Mann: a. a. O. S. 114
(10) Thomas Mann: a. a. O. S. 115
(11) (12) (13) Thomas Mann: a. a. O. S. 114
(14) Thomas Mann: a. a. O. S. 115
(15) Thomas Mann: a. a. O. S. 143
(16) Thomas Mann: a. a. O. S. 116

(四)

(1) 増田四郎『都市』(筑摩叢書、昭和五〇年) 二一一頁
(2) フリッツ・レーリヒ『中世ヨーロッパ都市と市民文化』魚住昌良・小倉欣一訳 (創文社、昭和五四年) 一五九—一六二頁

(五)

(1) (2) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. In: G. W. Bd. XII, S. 40
(3) Thomas Mann: Von Deutscher Republik. In: G. W. Bd. XI, S. 817, 819 「ドイツ共和国について」は森川俊夫訳を参照した。(『全集X』)

(4) Thomas Mann : a. a. O. S. 821
(5) Thomas Mann : a. a. O. S. 824
(6) (7) Thomas Mann : a. a. O. S. 851 森川訳『全集X』五二〇頁
(8) Thomas Mann : Lebensabriß. In : G. W. Bd. XI, S. 126 佐藤晃一訳『全集X』三三四頁
(9) ピーター・ゲイ『ワイマール文化』到津十三男訳（みすず書房、一九七三年）一七五頁
(10) Thomas Mann : Der Zauberberg. In : G. W. Bd. III, S. 685
(11) Thomas Mann : a. a. O. S. 686

結　語

(1) (2) Thomas Mann : Kultur und Politik. In : G. W. Bd. XII, S. 860